

「無痛分娩」を考える 妊婦さんご家族の皆様へ

「無痛分娩」は陣痛の痛みを麻酔を使って和らげるお産の方法です。
ここでは一般的に行われる“硬膜外鎮痛法”^{こうまくがいちんつうほう}という下半身の痛みを和らげる方法を説明しています。



無痛分娩のメリットは？

- 心臓や肺の調子が悪い妊婦さんの、呼吸の負担を和らげ、体の負担を軽くします。
- 血圧が高めの妊婦さんの、血圧の上昇を抑えることができます。
- 痛みを和らげることができ、産後の体力が温存できたと感じる人が多いと言われています。

無痛分娩のリスクは？

- 分娩に関すること
 - 赤ちゃんが産まれるまでの時間が長くなり、赤ちゃんが産まれる際、吸引や鉗子^{かんし}などの器械を使う頻度が高くなります。
また、陣痛を促す薬（子宮収縮薬）を使う頻度が高くなります。
- 麻酔によっておこりうる症状
 - [一般的な症状]
 - 足の力が入りにくくなることがあります。
 - 血圧が下がることがあります。
 - 排尿感が弱くなることがあります。
 - 体温が上がるることがあります。
 - [まれだが重い症状]
 - 予期せず、脊髄くも膜下腔に麻酔薬が入ってしまい、重症の場合は呼吸ができなくなったり、意識を失ったりすることがあります。
 - 血液中の麻酔薬の濃度が高くなり、中毒症状がでることがあります。
 - 麻酔の針の影響で強い頭痛がおき、場合によっては、処置が必要になることがあります。
 - 硬膜外腔や脊髄くも膜下腔に血のかたまりや膿がたまり、手術が必要になることがあります。

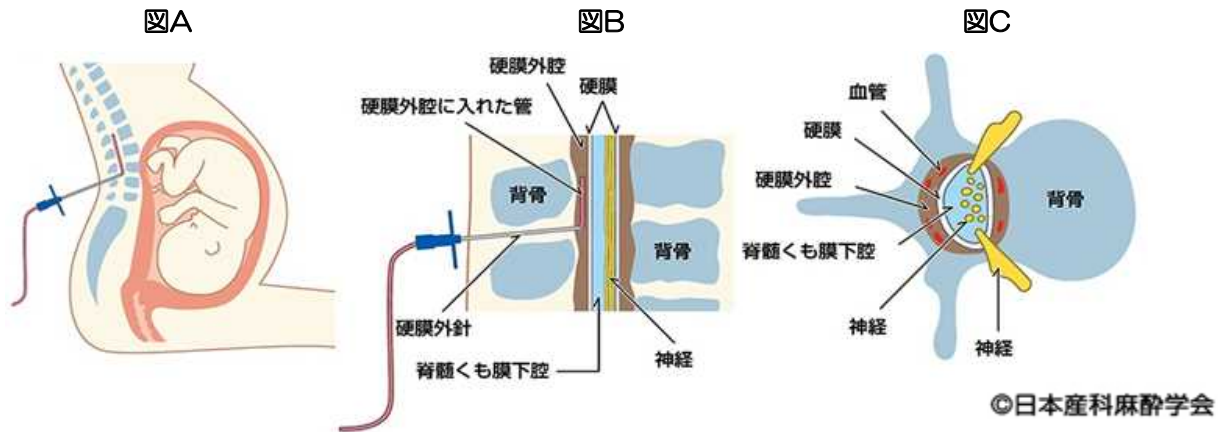
なお、この報告は、2018年3月時点のものです。
担当医から最新の情報を入手しましょう。

無痛分娩Q&A

検索

無痛分娩の方法

お母さんの体を図Aに示します。背骨の周辺を拡大したものが図Bです。同じ部分の背骨を水平の断面で見たものが図Cになります。分娩台の上で、横になるか、座った状態で背中を丸くして、背中を消毒し、腰のあたりに局所麻酔をします。硬膜外腔（痛みを伝える神経が含まれた脊髄の近くにありますが）というスペースに、硬膜外針を入れます。針の中を通して、カテーテルと呼ばれる管を入れます。カテーテルを通して麻酔薬を入れて、陣痛の痛みを和らげます。



今回の無痛分娩の研究でわかったこと

- 日本では、全分娩のうち約5%が無痛分娩で、近年、増加傾向です。
- 2010年から2016年までに全国で271人の妊産婦さんが様々な原因で亡くなっています。そのうち、無痛分娩を行っていた妊産婦さんは14人（5.2%）でした。原因は、大量出血が12人（羊水塞栓症10人、子宮破裂1人、産道裂傷1人）、感染症が1人、麻酔が1人でした。

安全な無痛分娩のために

厚生労働省の「無痛分娩の実態把握及び安全管理体制の構築についての研究」では、無痛分娩を行う各診療所や病院は、診療体制を整備の上、情報公開をすることが望ましいと考え、そのための体制づくりを提案しています。無痛分娩を考える妊婦さんやご家族の皆さんは、担当医と相談し、各施設の体制をよく理解した上で、分娩の方法を選びましょう。

参考：施設に求められる情報公開の項目

- 無痛分娩の診療実績
- 無痛分娩の説明文書
- 無痛分娩の標準的な方法
- 分娩に関連した急変時の体制
- 危機対応シミュレーションの実施歴
- 無痛分娩麻酔管理者の研修歴、無痛分娩実施歴、講習会の受講歴
- 麻酔担当医の研修歴、無痛分娩実施歴、講習会の受講歴等
- 日本産婦人科医会の偶発事例報告事業・妊産婦死亡報告事業への参画状況
- ウェブサイトの更新日時